Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-04

古典派経済学者の知的交流 ： ロバート・トレンズの生涯とその著作

久松, 太郎

(Citation)
国民経済雑誌,210(5):67-95

(Issue Date)
2014-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009012

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009012

古典派経済学者の知的交流

――ロバート・トレンズの生涯とその著作――

久　松　太　郎

国民経済雑誌　第 210 巻　第 5 号　抜刷

平 成 26 年 11 月

古典派経済学者の知的交流

――ロバート・トレンズの生涯とその著作――

久　松　太　郎

ロバート・トレンズ（Robert Torrens）は，主に経済学者として知られているが，職業軍人，国会議員，新聞社の経営者およびその論説委員，小説家など，多岐にわたる活動を経験した異色の人物であり，多くの同時代人と知的な交流を行ってきた。また，彼が生涯に残した著作は，新聞での論説など小さなものも含めれば，実に100点近くにのぼる。本稿では，先行研究で取り扱われなかった資料などを加えながら，トレンズの生涯とその主な著作を整理し，彼が同時代人たちとどのようなネットワークを築き，どのような知的交流を行ってきたのかを論ずる。

キーワード　　ロバート・トレンズ，古典派経済学，知的交流

1　は　じ　め　に

2011年，イングランド南部の港町ポーツマスにある王立海兵隊博物館で，一振りの剣が展示された。それは，アンホルトの戦い200周年の記念展示であった。カテガット海峡に浮かぶアンホルト島は，1809年５月にイギリス軍によって占領され，防備のための駐屯部隊がおかれた。1811年３月27日，数千名のデンマーク軍が島に押し寄せ，攻撃を開始した。隊員数わずか数百名のイギリス軍は，２名の尊い命の犠牲と30名の負傷者を出すことになったが，必死の応戦により，700名ほどのデンマーク兵を捕虜とする大勝利をおさめた。捕虜の他にも200名の死傷者を出したデンマーク軍は，撤退を余儀なくされた。イギリスの大衆は，この不等な戦力での勝利をかの有名なテルモピュライの戦いになぞらえ，兵士に喝采を送った。この戦勝を称えて指揮官に贈呈されたのが展示品の剣であり，この指揮官こそ，ロバート・トレンズその人であった。[1)]

トレンズは，1780年（推定），３人の子どもの長男としてアイルランドの牧師一家に生まれた。故郷の教区学校で教育を受けた彼は，その後，海兵隊員として身を立てることを決意した。1796年２月１日に16歳で少尉として入隊したトレンズは，翌年11月18日に中尉へと昇級した後，1801年にチャリティー・ハーバート・チュート（Charity Herbert Chute, c. 1784-1854）と結婚して５人の男児に恵まれた（Moore 2009: 56）。中でも，次男のリチャード（Robert Richard Chute Torrens, 1812-84）は，後に南オーストラリアの初代植民地総督とな

り，土地権利登記制を定めた「トレンズ法」の立案者として知られている（Howell 2009: 58-9）。

経済学者トレンズは，先に述べた職業軍人の他にも，国会議員，新聞社の経営者およびその論説委員，小説家（彼の経歴に含めるにはあまりに些細な経験でしかないが[2]）など，多岐にわたる活動を経験した異色の人物であった。彼が生涯に残した著作は，新聞での論説など小さなものも含めれば，実に100点近くに及ぶ。トレンズの生涯と著作に関する研究としては，人物事典の類を除けば，Meenai（1956）に始まり，海兵隊員としての彼を調査したFetter（1962; 1990），その政治活動をまとめた河合（2006）などがある。本稿は，先行研究に依拠しつつも，それらで取り扱われなかった資料などを加味し，トレンズが，彼の同時代人たちとどのようなネットワークを築き，どのような知的交流を行ってきたのかを整理することで，今後のトレンズ研究の一助とすることを目的とする。

次節以降の構成は，以下の通りである。第２節では，海兵隊員であったトレンズが，経済学者としてデビューした後に，新聞社の経営や執筆活動などを通じて，他の主要な古典派経済学者と交流を始めた事情を描き出す。第３節では，トレンズのロバート・オウエン（Robert Owen, 1771-1858）の計画に対する批判に始まり，そこから選挙活動の簡単な紹介を経て，彼が50代を過ぎて熱心に取り組んだ植民運動について言及する。ここでは，主に彼の公的なネットワークに触れる。第４節では，経済学クラブなどの活動を通じて，トレンズが古典派においてどのような立場にいたのかを示すと同時に，経済学の思考において彼がどのような人物と意見をともにし，あるいは異にしたかを，時間の流れとともに論ずる。また，彼の経済学史上の最も大きな貢献と目され，彼が初期から晩年にかけて継続して研究してきた貨幣理論についての代表作を紹介し，それに関連してどのような人物と関わってきたのかにも言及する。第５節では，トレンズおよび彼の経済学が20世紀以降どのように評価されてきたのかに簡単に触れ，結びにかえる。

2　英国海兵隊と新聞社の経営

2.1　経済学者としての門出とジェームズ・ミルへの接近：『エコノミスト論難』（1808年）

イギリス軍がナポレオン率いるフランス軍と戦争状態にあった頃，敵国フランスで産声をあげた重農主義の考えに傾倒したイギリス人がいた。ウィリアム・スペンス（William Spence, 1783-1860）がイギリスにおける農業の重要性を世に訴えたのは，1807年のことであった（Spence 1807）。その前年に大尉へと昇進していたトレンズは，自らが直接関わっていたこの戦争と経済との関係性に考えをめぐらせていた。ナポレオンの大陸封鎖は英仏間の自由な通商を妨げており，そのために，さもなければもたらされるはずの貿易利益を両国とも獲得しそこねているというのが，彼の主な考えであった。1808年，国際分業体制での自由

貿易を主張したパンフレット『エコノミスト論難』（Torrens［1808］1993）が出版されたが，これは，Économiste と自称していた重農主義者たちへの批判書であり，イギリス重農主義者スペンスに対抗したものであった。経済学者としてのトレンズの人生は，こうして幕を開けた。カトリック解放の請願を取り扱った，経済学以外の彼の書物『カトリック問題考』初版（第 2 版1813年）が出版されたのも1808年であり，この年は著述家としての彼の出発年であったといえる。

トレンズが大尉になった1806年，19世紀の偉大な思想家ジョン・ステュアート・ミル（John Stuart Mill, 1806-73）は産声をあげた。彼の父ジェームズ・ミル（James Mill, 1773-1836）もまた，トレンズのパンフレットが出たのと同じ年にスペンスへの回答書（Mill 1808）を出しており，後に古典学派で重要な役割を果たす 2 人の経済学者は，まさにこの時，著書を通じて接近しつつあったのである。「最大多数の最大幸福」で知られる功利主義者ベンサム（Jeremy Bentham, 1748-1832）と父ミルとの親交が始まったのも，この頃であった。

2.2　通貨問題への関心：『貨幣および紙幣』（1812年）

父の英才教育のもとで 3 歳の J. S. ミルがギリシャ語の学習を強いられていた頃，ロンドンの金融と商業の中心地シティでは，ある紳士がその非凡な才能により証券取引で大きな成功をおさめていた。ビジネスで得た知識をもとに通貨問題についての草稿を書き上げた彼は，それを『モーニング・クロニクル』を発行する新聞社の所有者ペリー（James Perry）にみせたところ，当紙での公表を勧められた。本人はあまり乗り気ではなかったが，彼はしぶしぶそれを承諾した。この男こそ，19世紀古典派経済学の征服者デイヴィッド・リカード（David Ricardo, 1772-1823）であった。1809年の『モーニング・クロニクル』に掲載された通貨問題に関する論説（Ricardo 1951-73, III: 13-46）は，彼のデビュー作となった（X: 7）。すでに経済学の論壇に立っていたトレンズもまた，後に通貨問題に大きな関心を寄せるが，それはこの時より数年後のことであった。

トレンズがアンホルト島での軍務についていたある冬の時期，寒さが厳しさを増し，島周辺の海は氷で覆われ，敵軍の進入を妨げる自然の防壁がつくられた。18世紀スコットランドの偉大な哲学者アダム・スミス（Adam Smith, 1723-90）の名著『国富論』（Smith 1776）を持参していたトレンズは，通貨について思索をめぐらせ始めた。この研究成果をまとめて1812年に出版されたのが，『貨幣および紙幣』であった（Torrens 1812: vi-viii）。すでに通貨問題に関する論文をいくつかもっていたリカードがこの著書を手にしたのは比較的遅く，1815年の 4 月頃にトレンズ本人から献呈されたものと考えられている。リカードは，人口論で著名な友人のトーマス・ロバート・マルサス（Thomas Robert Malthus, 1766-1834）との

手紙のやりとりの中で何度かこの著作を話題にあげているが，トレンズの通貨論には否定的であった[3)]。

2.3　リカードのよき理解者，マルサスのよきライバル：『穀物貿易論』（1815年）

1811年の戦いでの軍功により名誉少佐の位を授かっていたトレンズは，アンホルトの駐屯軍が従うべき軍事規約は海軍と海兵隊のどちらのものであるかをめぐって，海軍大佐としばしば衝突し，島での指揮権を一時的に奪われることさえあった（Fetter 1962: 154-5）。彼がこうして職業軍人を続けている間に，対仏戦争は沈静化に向かっていた。終戦を迎えつつあった1814年頃，彼の経済学上の関心は，他の多くの経済学者と同様に，穀物貿易の問題にあった。

年が明けると，新たな穀物法に関する案件が下院で討議されることが予想された。経済学者たちは，この問題に関する各々の持論を展開したが，とりわけ1815年２月に出そろった４人の著者による５つの論著がよく知られている（Ricardo 1951-73, IV: 4-5）。すなわち，マルサスの『地代論』（Malthus 1815a）と『外国産穀物輸入制限政策』（Malthus 1815b），ウェスト（Edward West, 1782-1828）の『土地への資本投下』（West 1815），リカードの『利潤論』（Ricardo 1951-73, IV: 9-41），そしてトレンズの『穀物貿易論』（Torrens 1815）である。マルサス，ウェスト，リカードの著作がいずれも小冊子であったのに対し，トレンズのものは，序文を含めて350頁を超える書物であった。また，トレンズ本人の主張によると，『穀物貿易論』は，彼がマルサスの『地代論』とリカードの『利潤論』を知る前の1814年に執筆され，印刷に回されていたという。そのため，差額地代説などの古典理論は，彼らに先立って提唱されたものであると，トレンズは宣言している（Torrens 1820: xvi; 1829: ix）。

マルサスとリカードは，すぐにトレンズの著書に関心を示し，おそらく３月半ばまでには２人とも読了していた（Ricardo 1951-73, VI: 185）。トレンズの「とても有能な仕事ぶり」に感心したリカードは，彼をよき理解者として歓迎し，彼がマルサスのよきライバルになりうると確信した（188）[4)]。トレンズの見解が全てリカードの賛成を得たわけではなかったが，両者とも穀物貿易の自由化を主張したことで意見の一致をみた。この年の２月17日，予想通りに新穀物法案をめぐる討議が始まり，彼らの主張もむなしく法案は３月10日に通過した。こうしてイギリスは保護主義をいっそう強めることになったのである（VI: 4）。一方で穀物法論争の事実上の勝利者となったマルサスは，反対の立場をとるトレンズの著作の評判が気がかりで，リカードに状況を伺った（202）。リカードは，自ら出席した地質学クラブの例会で，『穀物貿易論』が穀物法問題を反駁できないほどに論じ尽くした著書として話題を集めていたことから，それが「とても広く読まれている」と感じていた（205-6）。ところが，実際の売行きの方はいまひとつだったようで，リカードが出版社のマリー（John Murray）に

問い合わせたところ，販売部数はわずか150部未満であった（VII: 166）。

リカードとマルサスとの間でこの頃に行われた手紙のやりとりでは，『穀物貿易論』の話題でもち切りであった（VI: 211-2, 212-4, 223-4, 269）。トレンズとリカードとがいつ邂逅したのかについては，幾人かの研究者の間で憶測が飛び交ったが，残念ながら決定的な証拠はない（Meenai 1956: 49; Robbins 1958: 3; Fetter 1962: 156）。しかし，リカードが1815年４月16日に友人宅でトレンズと「とても楽しい１日を過ごし」，その３日後に彼らがリカード邸で夕食をともにしたことは，確かである（Ricardo 1951-73, VI: 215, 219）。いずれにしろ，彼らの知的交流は，その後の古典派経済学の進化に大きな影響を及ぼすことになるのであった。

新穀物法が施行された翌年，トレンズは，農業問題を取り扱った『リヴァプール宛書簡』（Torrens 1816）というパンフレットを出した。『穀物貿易論』での利潤と地代についての取り扱いに不満を抱いていたリカードは，トレンズがそこで「利潤と地代に関する自分の見解を全て採用している」ことを喜んだ。特に，食料獲得の困難とともに賃金が上昇しても，それが全ての商品の価格を引き上げることはありえない，というリカードの見解に，トレンズがかつての自説を翻して共鳴してくれたことに感激した（Ricardo 1951-73, VII: 24）。力強い援軍が現われた歓喜の思いを，リカードは改めてマルサスに伝えた。「トレンズ少佐は，…利潤や地代などについてあなたが私独特のものとおっしゃるどの見解にもすっかり改宗してしまったように思われます。ですから，あなたの権威にも彼の権威にも認められないような経済学原理を私はもち合せていないと，今でははっきりと言えます」（26）。

ところでトレンズが『穀物貿易論』を「大至急，印刷に回した」理由は，それが「最近の穀物法案の通過がもたらそうとしていた国家的被害からの回避を助ける機会になりうると思い，その時期に刊行を間に合わせるため」であった。しかし，「穀物貿易が富の分配に及ぼす影響に関わる欠陥が自著の中にある」（Torrens 1820: xvii）ことに気づいた彼は，分配の理論についての別の著作を新たに出したいと，マリーに願い出たが，『穀物貿易論』の売行き低迷を理由に断られてしまった。「トレンズを過小評価しすぎだ」と憤慨したのは，リカードであった（Ricardo 1951-73, VII: 141）。トレンズは，仕方なく，分配の理論を含むひとつの編を1815年版の『穀物貿易論』に追加し，それを第２版として1820年に出版した。このような事情で出版されたわけであるから，従来から存在していた３つの編に含まれている分配の理論と，新たに付加された第４編の理論とが一貫していないのは当然であった。もとからあった分配の理論に批判的であったリカードは，新たに加えられた第４編を読み，「トレンズ中佐は正しい原理の最も有能な擁護者の１人になりつつある」と満足げであった（VIII: 163）。この年の５月号の『ファーマーズ・マガジン』には，「リカード，トレンズ両氏諸説の概論」（Anon. 1820）と題された匿名の論文が掲載された。しかしトレンズは，リカード

の全ての学説の擁護者となることはなく，むしろ批判者としての様相を強めていくのであった。

2.4　リカード批判とマカロックとの邂逅：『富の生産』（1821年）

1817年，リカードの偉大なる著書『経済学および課税の原理』（Ricardo 1817；以下，『原理』と略記）が上梓された。トレンズには著者本人から献本が届けられた。ところが，ページをどれほどめくっても自分の名前があげられていないことに，彼は失望した。『原理』に含まれる議論のいくつかは自分の着想に由来するものだと思っていた彼は，すぐさまリカードに書面を送りつけた。しかし，リカードにしてみれば，トレンズの学説には「これといって目新しいと思えるものはひとつもなかったのである」（VII: 179-80）。リカードは，父ミルにこのことを相談し，第2版では「トレンズの名前を2度あげて賛意を表した」ことを告げた（VII: 333）。1か所は，『原理』第5章の「労働の自然価格」を説明する部分で，リカードは，トレンズの『穀物貿易論』初版の63頁（リカードは「68頁」と誤記）の文章を引用した後で，「この問題については何もかも，トレンズ少佐がきわめて巧みに説明している」と記した（I: 96-7）。もう1か所は，その第19章「貿易経路の急変」にあり，「穀物の輸入制限が不得策であると論ずる最も優れた刊行物の中に，トレンズ少佐の『穀物貿易論』を入れてよいだろう。彼の議論は反駁されていないし，またそれを反駁することはできないと，私には思われる」と注記されている（271）[5)]。第2版の草稿を受け取った父ミルは，「トレンズをあのくらい褒めておけば，彼に対するあなたの義務は完全に果されたことになるでしょう」と，やや冷淡にリカードに返答している（VII: 349）。

しかし，トレンズにとってはリカードの労働価値説に同意できないことの方が問題であった。彼は，すぐさま『原理』に対する批評の執筆にとりかかり，『エディンバラ・レヴュー』での掲載を申し出た。ところが，当誌に掲載されるリカード評論の執筆権は，すでにマルサスに与えられており，彼が辞退した場合にだけ，トレンズに執筆権が与えられることになった。自らのリカード評論の原稿をすでに書きあげていたトレンズは，産児制限論で知られる友人のプレイス（Francis Place, 1771-1854）に宛てた9月11日付の手紙で，「僕は，多くの点でリカードに同意してはいませんが，その著作がもっている一般的な功績と独創性については高く評価しています」と述べている（179）。マルサスのリカード評論は，結局，『エディンバラ・レヴュー』に載ることはなかったが，トレンズの評論が掲載されることもなかった。掲載されたのは，リカードを師と仰ぐマカロック（John Ramsay McCulloch, 1789-1864）の評論であった。リカードの親しい友人の中には，「どうしてトレンズ少佐がその企画を全て断ることになったのか」不思議でならなかった者もいたようだが（309），彼が執筆を断ったのか，掲載を断られたのかどうかは明らかでない。

翌年の2月頃，トレンズは，投下労働価値説の妥当性についてリカードと直に対談する機会を得たが（IV: 305），そこでのトレンズの意見は，リカードに価値の理論を再考するひとつの契機をつくった。その秋には，マカロックとの初めての面会が実現している。英米の文筆家が出席する食事会がエディンバラで開かれ，2人ともそこに加わることを許された。「運よくマカロックの近くに席を与えられた」トレンズは，この「とても面白く気さくな」スコットランド人との出会いに喜びをかみしめ，自ら書き記したリカード評論を手渡した（VII: 315-6）。「リカードの価値学説について大いに議論し合った」2人の評論は，ともに1818年の『エディンバラ・マガジン』に受理され，その10月号にトレンズの評論（Torrens [1818] 1993）が，11月号にマカロックの反論（McCulloch [1818] 2003）が公表された。

エディンバラでは，スミス『国富論』の編者であるブキャナン（David Buchanan, 1779-1848）にも，トレンズは会うことができ，彼と「すぐに経済学の話を始めた」。彼が「短い会話」から判断する限りでは，ブキャナンはリカードのどの学説も認めておらず，マルサスを高く評価していた。トレンズにとってこのエディンバラでの滞在はとても有意義なものであり，そこを「すっかり気に入ってしまった」（Ricardo 1951-73, VII: 316）。

この頃のトレンズは，バグショットの王立軍事大学に通う息子が「試験に受かるだけの知識しか得ようとしない怠け者」であったために，退学させられるのではないかと心配し，父ミルに相談をもちかけていた。その際に，トレンズとマカロックの論文が公表される話を聞いたミルは，それをリカードに知らせた（315）。リカードはすぐに，『エディンバラ・マガジン』の最新号をもってくるように妻に頼んだが，なぜか彼女は違うものをよこしてきた。妻を通じて改めて出版社のマリーにその最新号を依頼したが，そうした手違いのために，彼はトレンズの評論を読むのが遅れてしまった（332）。11月24日付のマカロック宛の手紙に，「未見だが，数日中には手許に届くことを期待している」（338）とあることから，おそらく11月末頃に，リカードはトレンズの批判に接したものと思われる。マカロック本人はトレンズへの反批判を書いたことをリカードに告げたが，その内容は，リカードの期待に応えるには不十分であった（354）。マカロックの評論に満足できなかったリカードは，自ら反論を執筆することにした。同じくそれに不満であったミルは，リカード本人が筆を執ったことを喜び，それが雑誌に掲載されることを期待したが，当の執筆者にはその気がなかった（360, 364, 372, 376）。その年のクリスマス頃にミルへと論文が届けられ，彼は拝受の御礼を伝える手紙を翌1819年の1月中旬に送っているが，それは現在も発見されていない（376-8）。リカードとミルとの間では，トレンズの価値の理論について頻繁に議論が行われており，それに対する注目の高さがわかる。同じ頃，トレンズもまた価値についての論文を1本用意していたようだが，これも未だ見つかっていない（VIII: 128, 138, 142）。軍人としてのトレンズが生涯を通じて保持した名誉中佐の位を授かったのは，この年の8月12日のことであった

(Meenai 1956: 49)。

1821年７月28日，トレンズの代表作のひとつである『富の生産』が上梓された[6)]。彼の声は弾んでいた。「経済学における論争の時代は過ぎ去り，時代は急速に合意へと向かいつつある。20年もすれば，その基本原理のいずれについても疑問は存在しなくなるだろう」(Torrens 1821: xiii)。この予想が完全に外れたことはいうまでもないが，この著書で交換価値の相対性を強調し，不変の価値尺度の存在を真っ向から否定したことで（65），彼は，ベイリー（Samuel Bailey, 1791-1870）という強力な援護者を得ることができた（Bailey 1825: 203-4)。

さて，リカードは彼から献本を贈呈してもらえることになっていたが，待てどもそれは一向に送られてこなかった。自分で買えばよいものを，少なくとも４か月間も待ち続けたリカードは，その間マルサスにいくら感想を尋ねられようとも，献本が送られてこないことへのいらだちをぶつけることしかできなかった（Ricardo 1951-73, IX: 46, 66, 77, 79-80, 113)。『エコノミスト』の初代編集長バジョット（Walter Bagehot, 1826-77）は，かつてリカードのことを「金持ちなのに小さな額にもけち臭い倹約家」(Bagehot 1880: 159）と形容したが，この一連の出来事をもってその傍証とする見解もある（De Vivo 1986: 31)。同じ年にリカードも『原理』の第３版を出し，それをトレンズに献呈することを約束していたが，住所がわからず送れなかった（Ricardo 1951-73, IX: 46)。しかし，『富の生産』の序文で『原理』第３版について言及されていることからすれば，トレンズの方は自分でそれを入手していたようである（Torrens 1821: x-xiii)。

結局，リカードは，マルサスとの手紙で『富の生産』について話すことはなく，「絶対価値と交換価値」と題した未完の草稿で言及しただけであった（Ricardo 1951-73, IV: 374-5, 393-6)。マルサスはリカードに手紙を書き，「トレンズの作品は，器用に書かれており，全体的にみて，あなたにも賛成していますし，ほとんど同じくらい私にも賛成して下さっているように思えます」(IX: 79-80）と，やや肯定的に感想を述べている。リカード側にたってトレンズを批判してきたマカロックは，この著作の評論を1821年12月22日号の『スコッツマン』で公表した（O'Brien 1970: 131)。

1826年，トレンズは，しばらく絶版状態にあった『穀物貿易論』の第３版を，従来の版にほぼ全面改訂を施して公刊した。第３版では，従来の版とは異なる新たな序文が付され，価値論で合意をみたベイリーと，通貨論争で後に対立することになるトゥック（Thomas Tooke, 1774-1858）とが高く評価され，リカード，マカロック，父ミルに対しては以前にも増して批判が浴びせられている（Torrens 1826: x-xviii)。『穀物貿易論』はその後もさらに版を重ね，第３版の第３編第４章に「自由貿易が貨幣価値に及ぼす影響」についての議論が「第４節」として追加され，第４版の出版の運びとなった。トレンズは，外国産鉱物で造ら

れる貨幣の価値がいかなる諸原理によって規制されるかという問題を検討する際に，ペニントン（James Pennington, 1777-1862）から多くの着想を得たことを証言している（Torrens 1827: Advertisement to the fourth edition）。第4版に，「労働者階級の状態を改善する手段について」と題する補論（1832年に若干の変更をともなって独立した小冊子として復刻）が追加され，「新版」という版名で第5版（Torrens 1829）が出版された。こうして『穀物貿易論』は，トレンズの著作の中で最も版を重ねた著作となった。

2.5　ミル父子との論争

1820年頃，トレンズは，ウィッグ党急進派の夕刊紙『トラヴェラー』を発行していた新聞社の所有者となった（Ricardo 1951-73, VIII: 185）。同紙は，「とりたてて機知あり，きらめきありというわけではないが，健全な判断，周到な情報，立憲的原理によって際立った」新聞として評価を受けていた（Anon. 1823: 368）。経営のみならず執筆も行っていたトレンズは，マルサスの『経済学原理』初版（Malthus 1820）や父ミルの『経済学綱要』初版（Mill 1821）に対する論評を掲載している。前者の論評は，3日にわたり掲載され，富，利潤，地代，自由貿易などが論点となっている。マルサスの『経済学原理』初版については，マカロックらの書評があるが，トレンズのものは最もはやく発表された（久松 2007）。

他方で，父ミルの『経済学綱要』初版への論評では，リカード流の投下労働価値説への批判に論点がおかれている。トレンズの批判には，反批判の投書が寄せられ，論争へと発展した。寄稿者は，父に言われて回答書を執筆した16歳のJ. S. ミルであった（Mill 1873: 87-8）。こうして『トラヴェラー』は，若きミルが経済学的著述を初めて公表する舞台を用意したのである。当時はまだ労働価値説を擁護する側にいたミルは，トレンズの批判に対する決定打をもつことはできず，経済学へのほろ苦いデビューに終わった。ミルの寄稿文の掲載は，主筆であったコウルソン（Walter Coulson）の好意によるものだけでなく，彼の若き才能に対するトレンズの期待の表れでもあった（Mill and Torrens 1936: 19）。

経営面では，興味深いひとコマがみられる。1821年，トレンズは，『モーニング・クロニクル』の買収を企てたが，その計画は，はかなくも失敗に終わった。しかし，その埋め合わせをするかのような彼の新聞各社の買収劇は，ここから始まっていく（Mitchell 1967: 51-2）。翌年，彼は，夕刊紙『トゥルー・ブリトン』を『トラヴェラー』に吸収した。1820年1月1日に創刊した『トゥルー・ブリトン』は，2年も経たないうちに廃刊となった（1822年11月13日廃刊）。年の暮れの12月28日には，夕刊紙『グローブ』が『トラヴェラー』を吸収し，『グローブ・アンド・トラヴェラー』が誕生したが，トレンズはそのまま共同所有者となっている（Watson ed. 1969: 1792）。新たに生まれ変わった『グローブ・アンド・トラヴェラー』には，マルサスの『価値尺度論』（Malthus 1823）に対するトレンズの論評が掲載されてい

る。1824年には，３つの夕刊紙が当紙によって吸収された。２月18日には『ステイツマン』が，３月19日には『イヴニング・クロニクル』が，７月24日には『ネーション』が廃刊に追い込まれた。1828年７月26日には，夕刊紙『アーガス』も当紙による吸収のために姿を消した（Watson ed. 1969: 1792-3）。『グローブ・アンド・トラヴェラー』は，こうしてイングランド第２の日刊新聞にまで成長した（Moore 2009: 57）。

トレンズは，軍事規約おいて商業活動が禁じられていた現役の軍人であったため，弟の名前「アンドリュー・トレンズ」（Andrew Torrens）で登録し，新聞社を所有していた。こうした不正を，19世紀初頭のイギリス人ジャーナリストであったウィリアム・コベット（William Cobbett, 1762-1835）が見逃すことはなかった[7)]。彼の描写するトレンズ像は，つねに悪意と皮肉に満ちていた。踏みつけた靴をはき，ひげを３日も伸ばしっぱなしのトレンズが，農園に腰をおろして，ほうきの柄のような図太く汚い指で良質の豚肉の塊とパンをつかみ，ジョッキからあふれんばかりのビールでそれらを流し込みながら，朝食をとっている描写は，まさにその一例である[8)]。

1823年２月18日以降軍務を離れていたトレンズは，休職給を受けながら，ロンドンを拠点として執筆活動を続けていた。1830年にプリマス師団で全額支給の軍務に復帰し，その後すぐにチャタム師団への移動となった彼は，翌年の５月４日に正式位階として少佐に昇級した（Fetter 1962: 155-6）。コベットは，週刊誌『ポリティカル・レジスター』で，「ロンドンに住みながら『グローブ』という新聞社を経営している彼は，給与の全額を支給されている海兵隊の名誉中佐である。チャタム兵舎内に彼が有している，宿舎，石炭，ろうそく，使用人の費用は，人民により支払われている。加えて，チャタムで軍務中であるという仮面をかぶって彼が受給している，少なくとも年£500の給与，臨時所得，その他もろもろのいくらかは，ランカシャーの哀れな織工たちにより支払われている」と痛烈な批判を寄せた[9)]。

トレンズが軍を去ったのは，その２年後の1834年であった。同年10月17日付で承認された彼の退役を，イギリス各紙はこぞって報じた[10)]。退役によって返上された階級は，少佐の位であった。トレンズ自身の証言によると，大尉から少佐への当時の昇級は，「好意や依怙贔屓のない年功順」で決まるものであり，「行政の影響力が及ばない」ものであったという（Fetter 1962: 159）。こうした弁明をしなければならなかったのは，その頃の彼が国会議員であったことと関係している。

3　選挙活動と植民運動

3.1　初めての公開演説とオウエン批判

古典派経済学者の中には国会議員であった者が少なくなく，トレンズも例外ではなかった（O’Brien 2004: 11-2）。彼は，早くから政治の世界に興味を抱き，30代で出馬にふみ切るが，

議員として活躍をみせたのは40代半ば過ぎであった。おそらく，オウエンの計画に対する批判的感情が，彼を政治の表舞台へといざなったひとつの要因であったと思われる。

農業における収穫逓減の法則とマルサス流の人口法則という古典派経済学の二大法則を適用してオウエンを批判したトレンズの論文は，1817年の『パンフレッター』に掲載された。この論文では，労働者階級の救済策が主題となっているが，特に即効性をもつものとして彼が考えたのは，人口圧力を軽減させるための移民の奨励であった。トレンズは，1816年にはすでに自らの移民計画案をしたためていたと考えられる。当時『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の編者であったネイピア（Macvey Napier, 1776-1846）は，イギリスの流刑植民地であった豪州シドニー近郊のボタニー湾に関する論文の執筆を，父ミルに依頼した。しかしミルは，自分にはそれを書ける能力がないことを知っており，「その論文を寄稿できるうってつけの人物」としてトレンズを紹介した。「彼は，経済学の様々な分野についていくつかのとても優れたパンフレットを執筆なさっておりますし，彼がボタニー湾に関する情報収集に腐心し，その総督になるべく送られたプロジェクトをもっていることを私は知っています」（1816年10月23日付のネイピア宛書簡；Napier 1879: 16）。一方で，トレンズの移民論に攻撃の狼煙を上げたのはコベットであった。彼は，「本国土では人民は十分な食料にありつけないという理由をつけて，この1817年中に人民の追放をもくろむ，トレンズという名の最も卑劣な陰謀者のひとりを，吊し上げ罵倒し，この国の嘲笑にさらす」ことを，大衆に訴えた[11]。

1817年 8 月14日にシティ・オブ・ロンドン・タヴァンで開かれた第 1 回公開集会で，オウエンは共同村の構想を大衆に訴えた。トレンズもリカードらとともにその集会に参加し，オウエンのプランに対する最初の反対者となった。トレンズが最初に行った演説は，「いつものように」，「熱とアジの入りすぎた」ものとなってしまった。本人によれば，2 度目の演説では，「これらの欠点」は「かなり修正された」ようである。彼いわく，「両方とも，数字と若干の詩的な前置き以外は，まったく即席のもので，2 度目の演説のうちで最もよいと思う部分，すなわち機械がもたらす影響に関わる部分は，あらかじめ頭の中で準備していたものではございません」（1817年 9 月11日付のプレイス宛書簡；Meenai 1956: 51）。

1819年 7 月26日にケント公主催の集会でも，トレンズのオウエン批判は続けられた（丸山 1999, 44-5）。この演説の内容は，同年 8 月21日号の『スコッツマン』に発表され（Torrens 1819a），これを目にしたマカロックは，「私が記憶する限りで最もよいもののひとつ」と絶賛し，リカードに告げた（Ricardo 1951-73, VIII: 82）。『スコッツマン』の論説に，セー法則を支持してシスモンディ（Jean Charles Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842）を批判する議論を加えた評論が，同年10月号の『エディンバラ・レヴュー』に掲載された（Torrens 1819b）。リカードはこの新たに掲載された論文を「とても気に入った」が，全面的に賛成することはなかった（Ricardo 1951-73, VIII: 159, 256, 261）。マルサスは基本的に

反対の立場をとり，翌年に公刊された自らの『経済学原理』の中で，この論文におけるセー法則支持の見解を全面的に批判した（Malthus 1820: 354-66）。

3.2　政界入り：『賃金と団結』（1834年）

トレンズは，給与を全額支給される軍人の身にありながらも，1818年の総選挙でロチェスター選出の議員となるために出馬した。彼の出馬に大きな期待を寄せたのは，リカードであった。リカードは，「私はあなたのことをよく知っています」と書いた上で，トレンズに次のようにエールを送った。「あなたがもっている経済学の知識からすれば，財政に関わるどの問題においてもあなたの助言は欠かせないでしょう。今の立法府には，あなたのような有能な人物がずいぶん欠けていると思います。成功を心より願っています」（XI: xii）。しかし，トレンズはリカードの期待に添うことができなかった。落選した彼は，すぐさま対立候補者の当選を不服とする訴訟を起こしたが，無残にも敗れてしまった。そのうえ，訴訟費用の負担が彼を奈落へと沈めたのである（Meenai 1956: 51; 河合 2006: 258, 272）。

この頃のトレンズは，公私にわたって不幸な境遇にいた。しばらくの別居期間を経て妻と離婚した彼は，その後，別の女性と婚約を交わしていた。しかし，その婚約者の急逝という「人生最大の不幸」が，「愛と野心が望みうる全てのもの」を瞬く間に彼から奪い去った。トレンズは，当時の心情をプレイスにこう吐露している。「愚かにも，最高の知性と僕には十分すぎるほどの幸せとを手に入れたと思いこんだとたんに，それらは消え失せました。強い精神があれば失意も軽く流せるでしょうが，哲学でもいやせない，孤独で寂しい心しかありません」（1819年９月のプレイス宛書簡；Meenai 1956: 51）。

その後もトレンズは，1820年にロチェスターからの出馬を考え，一時はマカロックらの関心をひくも，勝てる見込みが得られなかったために結局は辞退を表明した（Ricardo 1951-73, VIII: 156-7）。そんな彼にも，商務省長官の娘エスター・サラ・サール（Ester Sarah Serle, 1778-1874）との再婚により，再び春が訪れた（Moore 2009: 56）。

一方，トレンズにエールを送っていたリカードは，一足先に1819年に国会議員となっていた。ビジネスから手を引いての政界入りであった。その年に行われた公債引受の競争入札において，彼は，世界史上の大財閥ロスチャイルド一族に敗れた。スラッファ（Piero Sraffa, 1898-1983）によれば，「1819年の公債取引は，ロスチャイルドにとっては金融帝国を建設するひとつの段階にすぎなかったが，リカードにとってはビジネスのキャリアを閉じる出来事だった」。「ロスチャイルドは，人生の主な楽しみをカネもうけに見出した」が，リカードは，「シティの活気にあこがれることもなかったし，彼が財政上の成功を求めたのは，田舎に隠居して「大好きな科学」をひっそりと研究する手段を得るためだった」（Ricardo 1951-73, X: 90）。後にトレンズも当選を果たしたが，２人が議会で席をともにすることはなかっ

た。

1826年の選挙でも，トレンズは再びロチェスターからの立候補を宣言したが，実際にはイプスウィッチ選挙区でウィッグ党の候補者として出馬し，当選した（河合 2006：258）。こうしたトレンズの公的活動に不満を抱き，選挙パレードで使う「ドラムと同じくらい空っぽの頭をした政治学博士」と彼をこき下ろしたのは，例のコベットであった[12]。他方で，カトリックを擁護するトレンズの演説は英カトリック協会の心をつかみ，その会長は感謝の手紙を彼に書いた。しかしコベットは，このことについても，「英カトリック協会と自称する口先だけのイギリス上流階級の一団」が「この高貴で勇敢な将校」トレンズを後押ししたと，皮肉をこめて揶揄している[13]。ともに当選を果たしたのは，『経済学対話』（Marcet 1816）でもって19世紀初頭の経済学の大衆化に努めたマーセット（Jane Marcet, 1769–1858）の弟ウィリアム・ホルディマンド（William Haldimand）で，トレンズと彼のための祝勝会が盛大に開かれた[14]。議会でのトレンズは，穀物法（1826年11月24日），自由貿易の支持（11月30日），機械輸出問題・宗教問題（12月 6 日），移民問題（1827年 2 月15日）などについて，熱意に満ちた演説を行った[15]。

トレンズの友人プレイスの日記（Wallas 1918：178–80）には，穀物法に反対する地主と賛成する地主との話し合いの場をつくろうと尽力する彼の姿などが記されている（1826年10月28日の日記）。しかし，プレイス本人は，トレンズの議会での活動にネガティヴな評価を与えている。彼の日記には，トレンズは，「フランスの綿商品製造を妨害するのが有用だと，思慮に欠けた老婆のように語っていた」（12月 5 日），「トレンズが勝ち目のないゲームをやっているのは明らかで，彼が勝者にならないことを望んでいる」（11月21日），「彼は，いつものように下院についての長い会話をいい加減にごまかしていた」（11月27日）などと記されている。プレイスは，トレンズに議員を辞めさせたいと思っていたようである（12月13日）。その熱意とは裏腹に，党員仲間からも，会期中は何もせず出しゃばるな，と忠告される始末であった（11月16日）。

まもなくして，トレンズの当選を不服とする申し立てがなされ，それが認められてしまい，彼は翌1827年の 2 月に議席を失った。念願の当選を果たしたトレンズの初めての議員生活は，わずか数か月で幕を閉じることになった。

1831年，アシュバートン選出議員として再び政界に返り咲いたトレンズは，選挙法案改正に尽力した。ところが，その改正による当選挙区の議席数縮小にともない，改正後の選挙では別の地区からの立候補を余儀なくされた。ワイト島のニューポートからの出馬が報道されもしたが[16]，最終的にはボルトンから出馬した[17]。ランカシャーのボルトンは，マンチェスター近郊という土地柄からも想像されるように，製造業を中心に繁栄した工業都市であった。

トレンズの立候補は，毎度のようにコベットの批判を招いた。「わが友よ，相も変わらず

「穀物法案および反アイルランド救貧法」について書き散らすのに彼が使っている筆のかわりに，肥やしの付いたケント式の熊手を彼に握らせてやろうではないか。…わが友よ，そんなことで紙を無駄にさせるのではなく，彼に穀物の栽培を手伝わせようではないか。彼に救貧法の必要性を感じさせようではないか」。コベットの批判は，このように痛烈なものであったが，彼が最後に，「人口抑止」のために，「諸君も子孫が増えないように特別の注意を払いなさい」と付言しているのは，マルサス人口論との関連でも興味深いものである。[18)]

この頃，ボルトンの住民に捧げると銘打って出版された『賃金と団結』は，「どのような原理によれば，賃金の引上げが実現でき，どの程度それが可能か」を明らかにすることを目的に書かれたもので，特に，「本書が賃金と賃金を規制するための団結の効果とに関わる章をいくつか含んでいる」点で，彼の経済理論と経済政策の双方を吟味する上で欠かせない文献のひとつとなっている（Torrens 1834: vi-v）。同年７月号の『エディンバラ・レヴュー』には，この著作に対する評論が，マーティノウ（Harriet Martineau, 1802-76）の著作（Martineau 1834）に対する評論とともに掲載されている。それによると，「時間と空間のごく限られた範囲を除けば，親方どうしの団結でも徒弟どうしの団結でも賃金を規制できるという主張が誤りであることを，トレンズ中佐の著作は，聡明で説得力のある文体で看破していることに何よりも価値がある」（Anon. 1834: 343-4）。

批判を浴びながらも見事に選挙戦を勝ち抜いたトレンズは，工場法，穀物法，救貧法，銀行改革，通商政策，アイルランドの10分の１税など広範囲にわたる課題について議会演説を行い，公務をこなした。[19)] しかし，1835年の選挙戦での敗北を最後に，議員としての彼をイギリス国民がみることはなかった。1837年には，グラスゴウからの彼の出馬が噂されたようだが（河合 2006: 271），彼自身にもおそらくその気があったように思われる。実際にその翌年に公刊された『賃金と団結』第２版（Torrens 1838）では，ボルトンの有権者と住民への献辞の代わりに，「知識の力により高い賃金率が永久に確立されうることを切に願い，本書をグラスゴウの綿職工に捧げる」という短い献辞が添えられている。献辞を取りかえただけの使いまわしがトレンズに議員の椅子を約束することはなかった。1840年代になっても彼の立候補の噂は尽きなかったようだが（河合 2006: 271），彼が国会議員に返り咲くことはなかった。

3.3　ウェイクフィールドとの協力関係：『南オーストラリア植民論』（1835年）

50歳を超えたトレンズが力を入れて取り組んだ経済政策に関わる問題のひとつに，南オーストラリアへの植民を推奨する政策があった。そもそもトレンズは，30代の頃から移民政策に強い関心を寄せており，移民推奨者として有名であったウィルモット-ホートン（Robert John Wilmot-Horton, 1784-1841）に先駆けて貧民救済のための移民計画を提起した人物であっ

た。当初は彼を支持して移民計画批判者に対抗する論陣を張っていたトレンズは，1830年頃になると，植民地改革運動のリーダーであったウェイクフィールド（Edward Gibbon Wakefield, 1796-1862）に肩入れするようになった。もともとトレンズがウィルモット-ホートンに近づいたのは，一部には，彼が公職につくために大物政治家たちと接触したいという，何とも不健全なもくろみからであった。しかし，ウィルモット-ホートン自身の政界での影響力が失墜しかかっていた1820年代末には，彼は，トレンズにとってほとんど用無しになっていたのである（Winch 1965: 51-2, 67-8）。

1831年，トレンズは，ウェイクフィールドらとともに，南豪土地会社（1834年に南豪協会と改組）の設立に携わった。1835年，南オーストラリアでの州設立に関わる植民委員会が設置され，トレンズはその議長を任された。しかし，その後の委員会は，「まったくくだらない無意味な事柄を来る日も来る日も議論する一種のおしゃべりクラブ」と化してしまい，トレンズの不満は募るばかりであった（Meenai 1956: 56）。さらに，委員会内部での幹部同士の争いが表面化し，組織は弱体化の方向に傾きつつあった。1839年，トレンズは，土地処分を行う委員の身にありながら，オーストラリアに1,000ポンド相当の土地を有しているのは好ましくないということを理由に身を引く決意をした。植民長官ラッセルは，その土地を処分すれば在任できるという選択権をトレンズに与えたが，1841年，彼は辞任を選んだ（56-8）。

オーストラリア南部の中心都市アデレードを貫流するトレンズ川，そこにあるトレンズ公園（やトレンズ湖）は，彼にちなんで名づけられたものである[20)]。また，植民委員会の政策促進を目的として書かれた『南オーストラリア植民論』（Torrens 1835）は，経済学に対する貢献も含んでいる点で彼の重要な著作のひとつとなっている。植民計画に対する彼の熱意は，それに関連する彼の数々の著書やパンフレット，新聞各紙の論説などからもよくわかるであろう。

4 経済学クラブ

4.1 経済学クラブとリカード経済学の失墜

1821年4月18日，リカードは重要な審議のために下院で公務についていた。ちょうどその頃，トレンズ，父ミル，トゥック，通貨学派の主要人物と目されるノーマン（George Warde Norman, 1793-1882）ら，9名の有識者が，ロンドンのホランド邸に集まり，経済学について自由に語り合う場の設立に向けて話し合いを始めていた。そこでは，会の運営方法や会費など様々な事項が討議されていた。この日の話し合いをもって誕生したのが，イギリス経済学史において無視できない役割を果たしてきた「経済学クラブ」と呼ばれるある種の研究会であった。欠席を余儀なくされたリカードには，後日，トレンズにより決定事項が伝えられた（Ricardo 1951-73, VIII: 367）。4月30日，（現在のロンドンの地下鉄コヴェント・ガーデ

ン駅からほど近いところにあった）フリーメーソンズ・タヴァンで，記念すべき第1回の例会が開かれ，トレンズは，議長という大役を担った。リカードは，会員として誇れる人物として，トレンズ，マルサス，父ミルの3人の名前をあげ，クラブ発足の喜びをフランスのセー（Jean-Baptiste Say, 1767-1832）に知らせた（381）。後に，セーは，クラブの外国人名誉会員となっている。

経済学クラブには公式の議事要録は残されていないため，会員の日記や手紙などからしかその詳細を知ることはできない。会員であったマレット（John Lewis Mallet, 1775-1861；仏名 Jean Louis Mallet ジャン・ルイ・マレ）によると，発足してから数年間の例会では，「たいていの場合，リカードとジェームズ・ミルとが一方の側に，マルサスとカゼノウヴとがもう一方の側に立っていて，どちらの側の意見にもよく反対していたのがトレンズとトゥックで，プリンセプが一種のかきまわし役だった[21)]」。これは，マレットが在りし日のリカードの思い出を綴った追悼の日記に書かれている。クラブ創設から約2年半後の1823年9月11日，リカードは51年の生涯を閉じた。遺産総額は，77万ポンド以上ともいわれている（Ricardo 1951-73, X: 103）。ロンドンの住まいとは別に保有していたギャトコム・パークの邸宅は，彼がいかに裕福な生活を送っていたかを示す不動産のひとつである。邸宅は，敷地面積2400万平方メートル以上ともいわれる広大なグロスターシャーの荘園内にあり，リカードはこれら全てを1814年に約6万ポンドで購入した（95-6）。この地所は，20世紀にエリザベス女王により買い取られたことでさらに人々の知るところとなった。

例会では会員により議題が提出され，討論された。リカードの死後10年も経たないうちに，次のような議題が提出された。「リカード氏の偉大な著作の刊行以来，経済学はいかに進歩してきたか。その著作で最初に展開された諸原理は，現在でも正しいものとして認められるのか」。議題の提出者はトレンズであった。これは2回にわたる例会で討論され，マレットの日記によると，最初の1831年1月13日の会合では，議題の前半部分については「立ち入った討論はされなかった」が，後半部分については活発な議論が交わされたようである。価値と地代についてのリカードの理論は，それぞれベイリーとトムソン（Thomas Perronet Thompson, 1783-1869）により論破されているし，利潤についての彼の理論は，「投下資本の回収に充てられる部分」が無視されているために不完全なものとなっていると，トレンズは主張した。彼は，「リカードの著作の偉大な諸原理はどれもあいついで放棄されてきたし，彼の価値論も地代論も利潤論も誤りだったと現在では一般に認められている」と声高に宣言した。トゥックは，価値と利潤についてのリカードの理論は誤りであるが，地代についての彼の理論には賛成した。マカロックは，利潤の理論についてはリカードに落ち度があることを認めつつも，その価値と地代の理論は正しいとの主張を貫き，彼の弟子であり続けた。マレット本人は，「リカードの著書は，厳密な数学的分析によって抽象的推論を推し進めるこ

とのできる者でない限り，封印されたのも同然の書物である」という考えを，日記に綴っている。しかし，次の４月14日の例会では，「リカードは，同じ言葉を違った意味に用いるという悪く曖昧な論者ではあったが，彼の原理はおおかた正しく」，「価値についても，地代についても，利潤についても，彼の理論は，彼の命題を言葉そのままにとれば正確ではないが，原則としては正しい」と「承認された」[22]。

一方で，亡きリカードの権威が崩れつつある状況をひとり悲しく見つめる出席者がいた。リカードの最大の論敵であり，親友でもあったマルサスである。トレンズが議題を提出した時，マルサスは，「今の時代が彼に対してあまりに激しすぎるのではないかと気がかりでならない」との思いを，ケンブリッジ大学の経済学者ヒューウェル（William Whewell, 1794-1866）にもらした（De Marchi and Sturges 1973: 391）。ヒューウェルは，リカードの理論を歴史上初めて数学的にモデル化したが，リカード的な演繹的推論には反対していた人物として知られている（Whewell 1831）。トレンズがクラブで引き起こした一連の議論は，リカード経済学の影響力が一時的に衰退をみせた場面であった（Henderson 1997: 526-54）。

トレンズがクラブを退会したのは，70歳を過ぎた頃であった。在籍期間は，30年にも及んだ。マレットは，トレンズをクラブの「最も優れた人物」のひとりとみなし，マルサスやトゥックらと経済学の能力では「知的同等者」であると記している[23]。トレンズが議長を務めた回数は，マレットと並んで，最多の９回であった。トレンズがこのクラブに残した功績は，決して少なくはなかった。

トレンズは，経済学クラブとは別に，公認の学会や協会にもいくつか所属しており，他の経済学者とのネットワークを広げていた。彼は，マルサスやトゥック，ニューマーチ（William Newmarch, 1820-82），スクロウプ（George Julius Poulett Scrope, 1797-1876），バベッジ（Charles Babbage, 1792-1871）らが所属していた王立学会のフェローでもあり，彼がそれに選出されたのは，1818年12月10日のことであった。また，トレンズは，王立統計学会の前身であるロンドン統計学会（1834年２月発足）に，マカロックやスクロウプ，シーニア（Nassau William Senior, 1790-1864），トゥックらとともに所属していたし，大英学術振興協会の有名な「F 部会」（経済科学および統計学）のメンバーでもあった（O'Brien 2004: 15; Blaug 1958: 183; Moore 2009: 57）。

4.2　トムソンとの決別：『通商政策に関する投書』（1833年）

リカード理論の有効性をめぐる討論がなされた翌年の10月から翌々年の１月にかけて，『ボルトン・クロニクル』では，通商政策に関してトレンズが当紙の編集者に宛てた投書が連載されていた。一連の投書をまとめて1833年に公刊された『通商政策に関する投書』は，20世紀半ば過ぎに LSE が企画した「経済学と政治学に関する稀覯書の復刻シリーズ」に所

収されたことで，一躍して当時の経済学者たちの耳目を集めることとなった（Torrens［1833］1958）。この著書をシリーズに加えることを推奨したのは，20世紀を代表するLSEの経済学者ロビンズ（Lionel Charles Robbins, 1898-1984）で，それが「互恵関税が交易条件に逆効果をもたらすことから，それに反対する主張を最初になした」書物であったことが，復刻の決め手となった（Robbins 1971: 227）。

ところで，人口には食料よりも速く増加する傾向があるとするマルサス説の批判者としては，オックスフォード大学の経済学教授であったシーニアが知られているが，トレンズは，10月31日に掲載された当紙への投書の中で，「この説を最初に批判した者」としての優先権を主張した（Torrens［1833］1958: 43）。シーニアの主張は，もともと同年３月15日付でマルサスに宛てた手紙（Senior 1829: 58）でなされたものであったが，その手紙が公に発表される前に，トレンズは，1829年版の『穀物貿易論』の補論で，人口が資本（食料）よりも速く増加するのではなく，むしろ資本が人口よりも速く増加する傾向にあると主張していた（Torrens 1829: 473-6; cf. Blaug 1958: 113）。

トレンズがシーニアに対して優先権を主張していた頃，今度は彼の貿易理論を公然と批判する論説が翌年１月号の『ウェストミンスター・レヴュー』に掲載された（Robbins 1958: 44）。執筆者は，トレンズがリカード地代理論を批判する際に頼りとしてきたトムソンであった。彼はすぐにこれに応酬し，その論説は１月９日の『ボルトン・クロニクル』に掲載された。彼が特に不快に感じたのは，トムソンが地代理論の構築に際して自分から着想を得たことはなかったと主張したことであった。トレンズはかつて，自分への言及がなかったことが単なる手抜かりであったのか，意図的な隠ぺいであったのかを，「わざわざ追及しようとはしなかった」。「独創的ではない箇所は正しく，独創的な箇所は正しくない」著作である『真の地代理論』（Thompson 1826）と『穀物法問答』（Thompson 1827）において，「私がかつて論証しようと努めていた学説を，この評者が熱心に普及してくれたことがわかっただけでも十分満足である」というトレンズの皮肉交じりの批判は，事実上のトムソンに対する決別宣言であった。彼は，トムソンの２つの著書における「特徴は，リカードの地代理論を修正したことにあるが，私はこれと同じ修正を，これらのパンフレットが出版されるずっと前に，穀物法に関わる私の試論で公表していた」と述べている（Torrens［1833］1958: 57）。トレンズは，『穀物貿易論』第３版の，「地代問題に関するリカード氏とその追随者たちの誤謬」を論じた節（Torrens 1829: 137-50）でそれをなしたと考えていた。

4.3　リカードへの懺悔：『予算』（1844年）

トムソンとの決別から10年後の1843年，トレンズがその若き才能に早くから着目していたJ. S. ミルの『論理学体系』（Mill［1843］1973-4）が出版された。これを手にした彼は，ミル

の真意を正確に理解できたかどうかは別として，方法論に関する自らの見解を改める必要にかられた。1841年から1842年にかけて彼は，財政，貿易，植民などに関わる自らの政策構想を，パンフレットや各紙論説を通じて大衆に示してきたが，これらをまとめてひとつの著書とする際に，「ミル氏の『論理学体系』で示された演繹法を若干の経済学問題の解決に応用した序論」を付すことにした。こうして，当のミルも後の『経済学の未解決問題』（Mill 1844）で賛意を表すことになるトレンズの『予算』（Torrens 1844a）が完成した。

トレンズによれば，ミルの『論理学体系』は，「抽象科学は実情に応じて拡張され修正されることで転覆されるのであり，容認された用語法を変更することは新しい理論を提起することであるという，これまで広まっていた妄想を見事に払拭した」（lii）という。以前の彼は，経済学の性急で過剰な一般化という方法を完全に否定していた。『富の生産』において性急で過大な一般化という「リカード氏の習慣」（Torrens 1821: xi）を批判した彼は，「理論は，どれほどもっともらしく見えても，否，どれほど証明に役立つように見えても，その結論が一般的な経験と一致しなければ，注意を促される資格すらもたない」（398）と主張していた。また，『穀物貿易論』第 3 版においても，トゥックの『高価格と低価格についての考察と詳細』（Tooke 1823）を，「理論的というよりはむしろ実際的なもの」であり，「リカード学派の早まった一般化と純粋なまでの抽象化とはまったく正反対の方法で」研究し，「種々の重要な事実からの広範囲にわたる帰納によって結論を打ち立てている」点で，「近年，この科学に与えられた最も価値ある貢献のひとつ」と絶賛している（Torrens 1826: xii-xiii, ix）。しかし，トレンズが（リカードの方法論としばしば対置される）マルサスの方法論を支持してきたわけではないことに注意しなければならない。「リカード氏は，…発見への情熱が先走って性急に一般化してしまい，十分に広範囲にわたる帰納によって自らの諸原理を確立するのに失敗している」し，「マルサス氏は，…特殊事象を観察する能力をひときわ有しているが，偶然と必然の関連を区別して，原因と結果の継起を明らかにしうる能力を幾分欠いている」。いずれの方法論にも批判的であった当時のトレンズは，経済学体系ならびに経済学原理の構築には，「一般化というリカード氏の習慣を，マルサス氏を特徴づけている特殊事象を観察する能力に結びつけることが必要である」と説いていた（Torrens 1821: iv）。

ところが，ミルの『論理学体系』は，「仮想的事例から演繹された一般命題は，その他の異なる事例においても重要な指標をもたらす」（Torrens 1844a: xi）という認識をトレンズにもたらした。彼は，リカードが導いた「結論」を，「仮定された前提のもとでは否応なしに同意せざるをえない必然的な真理」（xiii）と認めた上で，それをひとつの基準として必要な修正を加えれば，現実のいかなる経済をも説明できると考えるようになったのである。自分の息子ほど年の離れたミルによって目を覚まされたトレンズは，これまでリカードに対して行ってきたいくつかの批判の撤回を願い出た。特に注目すべきものは，リカード地代理論

批判への罪滅ぼしである。彼は，「リカード地代理論に対して以前に行った修正は，実質的には正しいものであった」（xx-xxi）としながらも，そうした「修正」は，その「見事な建造物」（xv）の単なる拡張であって，それを批判したことにも，それに代わる新たな理論を打ち立てたことにもならないと主張する。「地代の起源と増進について，リカード氏が仮想的事情から演繹したもろもろの結論は，社会の実情に合致していないと思われたために，私はそれらが間違っていると推測してしまった。私は，…リカードが進呈した型紙よりも広めの織物を製造するにあたって，彼の不滅の機械を使いながら，借り物の器具をあたかも自分でつくり出したかのような自己欺瞞にふけっていた」（xvi）。

トレンズいわく，「リカードの諸原理を批判する際に発案される学説は，これらの諸原理の単なる拡張でしかないことはよくある」（xxxviii）。例えば，東インド・カレッジにおけるマルサスの後任教授であり，リカード地代理論の批判者として知られる，ジョーンズ（Richard Jones, 1790-1855）の場合である。彼の『富の分配』（Jones 1831）における「優れた功績は，リカードがもろもろの仮想的事情から演繹した諸原理に必要な修正を施した上で，それを，きわめて巧みに，そしてきわめてうまく，社会の実情に適用してきたことにある」が，彼は，「この学識深く独創的な思想家の諸学説を拡張することで，それらを論駁していると勘違いしてしまったようである」（Torrens 1844a: xv）と，トレンズはいう。彼は，マルサスにしてもシーニアにしてもそうであったと指摘し，次のように述べている。「私の悪しき例証について来られたこれらの著名な経済学者の方々にも，私がここで歩もうとしている懺悔の道に足を踏み入れ，その道を突き進んでいただきたい」（xxii）。

こうしてトレンズは，「偉大なる師」（xxi）リカードの遺影に対し，せめてもの罪滅ぼしをなしたのである。『論理学体系』との出会いは，確かに，彼に方法論を再考させるひとつの転機になったのである。

4.4　通貨論争：『メルボルン宛書簡』（1837年），『ピール条例の原理と運用』（1848年）

トレンズが経済学に与えた最大の貢献としてみなされることが多いのは，貨幣理論である。彼は，イングランド銀行の発券部門と銀行部門との分離を提唱した，1837年の『メルボルン宛書簡』（Torrens 1837a）により，通貨学派の代表者のひとりとして脚光を浴びることになった。この著作は，後に第２版（1837b）とその補遺（1837c）も出版されるほど，注目すべき彼の業績へと成長した。

この著作への評論が同年１月14日の『スペクテーター』に掲載されるや，トレンズはすぐさま回答論説を執筆し，それは，３日後の『モーニング・クロニクル』に掲載された。また，３月３日の同紙には，ロイド（Samuel Jones Loyd, 1796-1883；後のオーヴァストーン卿 Lord Overstone［1850-］）の著書を論評したトレンズの論説も掲載されているが，かつて自

ら買収を試みた新聞社の刊行紙に，彼が経済学史上で最大の貢献をなした貨幣論に関わる論説が掲載されているのは興味深い。

1840年代には，トレンズやロイド（オーヴァストーン）を中心とする通貨学派とトゥックを代表とする銀行学派との間で，いわゆる通貨論争が活発に繰り広げられた。この論争は終焉をみることはなかったが，1844年のピール銀行法には，彼が提唱したイングランド銀行における発券部門と銀行部門との分離案が規定されることになった。彼が上梓した『イングランド銀行特許状の更新および通貨統制』（Torrens 1844b）は，時の人となりつつあったJ. S. ミルの批判を呼び，『ウェストミンスター・レヴュー』における彼らの論争を喚起した。1847年には，ロイドとの共著や『1844年の銀行特許条例の運用』（Torrens 1847）などが公刊され，その翌年には，トゥックらの攻撃からピール銀行法を擁護することを目的とした『ピール条例の原理と運用』など，トレンズの貨幣論に関する著書が矢継ぎ早に現れた。『ピール条例の原理と運用』は，第3版まで版を重ねるトレンズ自身の代表作のひとつとなり，1857年以降の版では，J. S. ミル批判を含む章が追加されている（Torrens 1858a）。

1850年代，古希を過ぎたトレンズの執筆活動は依然として衰えを知らなかった。上記のいくつかの著作の他にも，パンフレットや書評の発表は続いた。その多くが貨幣論に関わるものであったことからして，彼の晩年の関心がそこに向けられていたことがわかる。最後の出版物となった論文（Torrens 1858b）は，『エディンバラ・レヴュー』の1858年1月号に掲載され，オーヴァストーンの貨幣論への賞賛，1856-57年の通貨危機の原因，1844年のピール銀行法に従った通貨政策の将来における有効性などが論じられている（Robbins 1958: 345-7）。

5　結びにかえて

20世紀経済学界の巨匠シュンペーター（Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950）は，「純粋理論について空気の希薄な上層にまでのぼりつめた」古典派経済学者という評価をトレンズに与えたが，その名前を，「アダム・スミスからジョン・ステュアート・ミルまでの間で主な飛び石となる著作を書いたイギリス人」のリストに記すことはなかった。そこに記されたのは，リカード，マルサス，シーニアの3名であった。トレンズを適切に解釈できる研究者が現われるまでは，「リカードやマルサスと肩を並べる「古典学派の建設者」のひとりとして彼を語るには，少々機が熟していない」とのことである（Schumpeter 1954: 484, 490）。

しかし，シュンペーターのそうした評価が世に出たのと同じ頃，ひとりのイギリス人経済学者がトレンズの魅力にとりつかれていた。「トレンズは，最も長生きした19世紀の古典派経済学者であった。つまり，彼はマルサスやリカードの同時代人でありながら，…彼の最後の論文が現われたのは，J. S. ミルの『経済学原理』の初版が出版されて10年後であった。こうして，彼は古典派の全期間を生きたのである。さらに，この学派のメンバーが実際に注

目した全ての話題，すなわち，価値と分配，そして貿易利益の性質に始まり，賃金と団結，植民論，通商政策の問題を経て，…いわゆる銀行学派と通貨学派との間で交わされた有名な論争を含む，貨幣と信用に関わる広大な分野の問題に至るまで，最も幅広く書いた人物が彼だった。私は，これら全てを耕しているうちに，この時代を生き抜いた一人の参加者の目を通して，19世紀の古典派経済学の進化を一般的に見渡すまたとない機会がここにある，と確信するに至った」。自らの研究人生を振り返って後年このように語ったのは，ロビンズであった（Robbins 1971: 227-8）。彼の手によって『ロバート・トレンズと古典派経済学の進化』が上梓されたのは，シュンペーターの評価が公にされてから数年後の1958年であった。リカード，マルサス，J. S. ミルには劣るが，父ミル，マカロック，シーニアらと比べてみてもそん色ない人物というのが，ロビンズのトレンズに対する評価であった（Robbins 1958: 258）。この研究が，彼に対する経済学史上の注目度を高めたのはいうまでもない。

旧東ドイツのベルリンの壁を中心に世界の歴史がひとつの転換期を迎えようとしていた頃，経済学史家のブラックは，「トレンズが最上級の古典派経済学者たちに匹敵する分析能力をもっていた」ことを確信し，「シュンペーターは，今執筆しようものならば，トレンズを…シーニアと同じグループに移すだろう」と宣言した（Black 1988: 223）。「リカードを別とすれば，トレンズはおそらく古典派経済学者の中で最も純粋な理論家だったし，実際にある点では，間違いなくリカードよりも優れていた」（O'Brien 2004: 5）というオブライエンの主張は，古典派経済学の研究者たちの間で現在一般的になりつつある代表的な見方であろう。

アメリカ経済学会の創設に尽力したセリグマン（Edwin Robert Anderson Seligman, 1861-1939）が，トレンズを忘却の歴史から救い出してから 1 世紀以上の時を経た今日，彼は，もはや「忘れられたイギリス経済学者たち」（Seligman 1903）のひとりではなくなった。20世紀最後の年には，デ・ヴィーヴォの編集により『ロバート・トレンズ著作集』（Torrens 2000）が刊行され，トレンズ経済学への接近はよりいっそう容易なものとなった。

1864年 5 月27日，トレンズは，ロンドンのクレイヴン・ヒル16番地にある自宅で静かに息をひきとった。死に瀕している頃，『経済学問答』なる著書が印刷中であったというが，それは現在も見つかっていない。『スペクテーター』の追悼記事は，次の一文で締めくくられた。「彼は，最期の最期まで，その判断の冷静さと明晰さで，彼を知る全ての人に感銘を与え，騒々しく雑多な現在ではめずらしくなりつつある，まったく気取ることのない威厳，古きイングランドの礼節，品のある物腰で，彼を知る全ての人を魅了した[24)]」。

注

本稿は，日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B）25780144）の研究成果の一部である。また，佐藤有史先生（湘南工科大学教授）から大変有益なアドバイスをいただきました。こ

こに記して感謝申し上げます。

1）‘Precious sword bought’, *Press Details,* 27 April 2011 [14 September 2012], (http://www.royalmarinesmuseum.co.uk /press/item/press-details/a-press-release); *Cobbett's Political Register,* Vol. 19: pp. 926-8, 13 April 1811; pp. 942-7, 17 April 1811; Meenai (1956: 49-50); Fetter (1962: 153-4)。

2）1809年の小説『セリビアの夫さがし』（全2巻）や1814年の長編小説『寛容無きがための被害者』（全4巻）がある。トレンズの執筆した文献のリストとしては，Robbins (1958: 259-47) と De Vivo (2000) がある。以下，本稿では，これらを大いに活用した。

3）Ricardo (1951-73, VI: 215, 218, 219)。また1816年4月の日刊新聞『サン』には，通貨問題についてトレンズが執筆した論説が6回にわたり連載されている。リカードは，全ての論説に目を通したわけではなかったが，その見解も受けいれることはなかった（VII: 28, 30; Anon. 1823: 368)。

4）参考文献の邦訳に関しては，大いに参考にしたが，必ずしもそれに従っていない。また，以下の引用文の傍点は，原文イタリックを示している。

5）『原理』第2版の出版後に，トレンズは名誉少佐から名誉中佐へと昇級しており，それを考慮してのことであろうが，リカードは，第3版では，「トレンズ中佐（Colonel Torrens)」に書き換えている。しかし，その変更は，前者の脚注だけであって，後者の脚注の改訂を失念している。

6）Ricardo (1951-73, VIII: 47)。『富の生産』には，「この国の実情に対する経済学原理の適用を含んでいる付録」がつけられるはずであった。しかし，間に合わず，「別本として印刷され，次期の初めに公刊される」ことになっていたが，これもまた実現しなかった（Torrens 1821: xvii)。さらに，『富の生産』は，トレンズの生前に唯一海外版の翻訳が出されたもので，そのイタリア語版が1856年に出版されている。

7）*Cobbett's Political Register,* Vol. 77: p. 19, 7 July 1832。Cf. Vol. 47, 5 July 1823; Vol. 76: p. 570, 2 June 1832; Vol. 77, 2 July 1832。

8）*Cobbett's Political Register,* Vol. 77: p. 337, 11 August 1832。

9）*Cobbett's Political Register,* Vol. 77: p. 19, 7 July 1832。同様の批判は，その他にも多数みられる。「このトレンズ中佐は，どこかしこの部隊長であり，あるいはそうであった人物で，新聞各社の偉大なる投機家（trader）でもある」(Vol. 47: p. 19, 5 July 1823)。「このトレンズは，ロンドンに住みながら新聞社を経営する傍ら，チャタムに駐在していると見せかけて，給与の全額を支給されている海兵隊の名誉中佐であるが，彼の給料以外にも，チャタムにある宿舎，石炭，ろうそく，使用人にかかる経費は，われわれが負担している」(Vol. 77: p. 293, 4 August 1832)。トレンズは，「『地球（グローブ）』と称す不潔な球の周りを転がりながら，「軍務中の将校」として人民から年間£500を獲得して」いる。彼は，「チャタムで肥やし運搬車を満タンにすることで給与の支払いを受けているのではなく，50マイルも遠くで政治学をベチャクチャしゃべっているだけである」(Vol. 77: pp. 336-7, 11 August 1832)。Cf. Vol. 77: pp. 201-2, 28 July 1832。

10）例えば，*The Morning Post,* 18 October 1834 は，『ロンドン・ガゼット』（10月17日）の記事（Fetter 1962: 160-1）をほぼそのまま転載している。

11）*Cobbett's Political Register,* Vol. 33: p. 5, 17 October 1818。トレンズは，先述したように，コベットが論説を寄せていた『ステイツマン』を1824年に買収したが，一説によると，その際の私怨が，

彼のトレンズに対するその後の度重なる攻撃の要因になったとされている（河合 2006: 261）。しかし，ここでの批判にもみられるように，コベットのトレンズへの攻撃はすでに始まっていた。1823年にもトレンズへの攻撃がみられる（*Cobbett's Political Register,* Vol. 47: pp. 8-49, 5 July 1823）。

12）*Cobbett's Political Register,* Vol. 59: p. 426, 12 August 1826。コベットは，トレンズを「無知と無礼の見本」とみなし，「ベスト・パブリック・インストラクター」として皮肉をこめて紹介している。彼の批判はまた，トレンズの支持者に対しても向けられている（pp. 421-30）。

13）*Cobbett's Political Register,* Vol. 61: p. 609, 3 March 1827。Cf. p. 665, 10 March 1827。

14）*Morning Chronicle,* 25 July 1826。

15）*Hansard's Parliamentary Debates,* Second Series, Vol. 16: pp. 134-5, 24 November 1826; p. 207 [30 November; pp. 294-5 & pp. 286-7, 6 December; pp. 492-5, 15 February 1827。その他，pp. 215-6, 1 December 1826 と p. 326, 8 December にもトレンズの演説が記されている。Cf. Meenai (1956: 54-5)。

16）*Cobbett's Political Register,* Vol. 77: p. 18, 7 July 1832—『ボルトン・クロニクル』6月30日の記事が転載されている。「トレンズは，ニューポートの人民に対して行った演説のひとつで，「1815年の穀物法案撤廃のために戦う」と語っている」(p. 321, 11 August 1832)。

17）*Cobbett's Political Register,* Vol. 77: pp. 232-5, 28 July 1832—ここには，トレンズに反対したリヴァプールの書籍販売業者スミス（Thomas Smith）の文章（7月4日および16日付）が収録されている。Vol. 77: pp. 631-3, 8 September 1832 には，コベットらが支持したロンドンの弁護士イーグル（William Eagle）のトレンズ批判がみられる（Cf. 河合 2006: 259-60）。

18）*Cobbett's Political Register,* Vol. 77: p. 337, 11 August 1832。

19）*Hansard's Parliamentary Debates,* Third Series, Vol. 4, 22 June 1831-Vol. 24, 16 June 1834 には，トレンズの多数の演説が記録されている。

20）'Precious sword bought', *Press Details,* 27 April 2011。

21）*Political Economy Club, founded in London,* Vol. IV, Tokyo: Nihon Keizai Hyoron Sha: p. 212. カゼノウヴ（John Cazenove, 1788-1879）は，マルサスの（彼の死後に出版された）『経済学原理』第2版（Malthus 1836）の匿名の編者である。プリンセプ（Charles Robert Prinsep, 1789-1864）は，セーの著書の英訳者として知られている。

22）*Political Economy Club, founded in London,* Vol. IV: p. 35.

23）*Political Economy Club, founded in London,* Vol. IV: pp. 226, 224.

24）*The Spectator,* 4 June 1864: p. 641。トレンズの訃報は，有力紙から地方紙に至るまで各紙で報じられたが，例えば次のようなものがある（全て1864年発行）。*Liverpool Mercury,* 1 June; *The Morning Post,* 1 June; *The Newcastle Daily Journal,* 1 June; *The Sheffield & Rotherham Independent,* 1 June/4 June; *Glasgow Herald,* 2 June; *Manchester Courier and Lancashire General Advertiser,* 2 June。

参　考　文　献

Anon. (1820). "Cursory Remarks on the Theories of Messers Ricardo and Torrens", *The Farmer's Magazine: A Periodical Work, Exclusively Devoted to Agriculture and Rural Affairs,* 21: 129-46.

Anon. (1823). "The Periodical Press", *The Edinburgh Review, or Critical Journal,* 38 (May): 349-78.

Anon. (1834). "Trades'- Unions and Strikes", *The Edinburgh Review, or Critical Journal,* 59 (July): 341-59.

Bagehot, W. (1880). *Economic Studies,* edited by R. H. Hutton, London: Longmans, Green, and Co.

Bailey, S. (1825). *A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; Chiefly in Reference to the Writings of Mr. Ricardo and his Followers,* London: Hunter.

Black, R. D. C. (1988). "Commentary" (on "Classical Reassessments" by D. P. O'Brien). In *Classical Political Economy: A Survey of Recent Literature,* edited by W. O. Thweatt, Boston: Kluwer Academic Publishers.

Blaug, M. (1958). *Ricardian Economics: A Historical Study,* New Haven: Yale University Press.

De Marchi, N. B. and R. P. Starges. (1973). "Malthus and Ricardo's Inductivist Critics: Four Letters to William Whewell", *Economica,* New Series, 40 (160): 379-93.

De Vivo, G. (1986). "Torrens on Value and Distribution", *Contributions to Political Economy,* 5: 23-36.

De Vivo, G. (2000). "Bibliographical List of Torrens's Works". In Torrens (2000).

Fetter, F. W. (1962). "Robert Torrens: Colonel of Marines and Political Economist", *Economica,* New Series, 29 (114): 152-65.

Fetter, F. W. (1990). "New Light on the Military Career of Robert Torrens", *History of Political Economy,* 22 (3): 545-9.

Henderson, J. P. (1997). *The Life and Economics of David Ricardo,* with supplemental chapters by J. B. Davis, edited by W. J. Samuels and G. B. Davis, London: Kluwer Academic Publishers.

Howell, P. A. (2009). "Torrens, Sir Robert Richard Chute (1812-1884)". In *Oxford Dictionary of National Biography,* edited by H. C. G. Matthew and B. Harrison, Vol. 55, Oxford: Oxford University Press: 58-9.

Jones, R. (1831). *An Essay on the Distribution of Wealth, and on the Sources of Taxation,* London: Murray.

Malthus, T. R. (1815a). *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which it is Regulated,* London: Murray.

Malthus, T. R. (1815b). *The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn; Intended as an Appendix to "Observations on the Corn Laws",* London: Murray.

Malthus, T. R. (1820). *Principles of Political Economy Considered with a View to their Practical Application,* London: Murray.

Malthus, T. R. (1823). *The Measure of Value Stated and Illustrated, with an Application of it to the Alterations in the Value of the English Currency since 1790,* London: Murray.

Malthus, T. R. (1836). *Principles of Political Economy Considered with a View to their Practical Application. Second Edition with Considerable Additions from the Author's Own Manuscript and an Original Memoir,* London: Pickering.

Marcet, J. (1816). *Conversations on Political Economy; in which the Elements of that Science are Familiarly Explained,* London: Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown.

Martineau, H. (1834). *The Tendency of Strikes and Sticks to Produce Low Wages, and of Union between Masters and Men to Ensure Good Wages,* Durham: Veitch.

McCulloch, J. R. ([1818] 2003). "Mr. Ricardo's Theory of Exchangeable Value Vindicated from the

Objections of R.", *Edinburgh Magazine, and Literary Miscellany; a New Series of the Scots Magazine,* (November): 429-31. In *David Ricardo: Critical Responses,* edited by T. Peach, Vol. 1, London: Routledge: 112-5.

Meenai, S. A. (1956). "Robert Torrens: 1780-1864", *Economica,* New Series, 23 (89): 49-61.

Mill, J. (1808). *Commerce Defended. An Answer to the Augments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett, and Others, Have Attempted to Prove that Commerce is not a Source of National Wealth,* London: C. and R. Baldwin.

Mill, J. (1821). *Elements of Political Economy,* London: Baldwin, Cradock, and Joy.

Mill, J. S. ([1843] 1973-4). *A System of Logic: Ratiocinative and Inductive; being a Connected View of the Principles of Evidence and the Methods of Scientific Investigation*. In *Collected Works of John Stuart Mill,* edited by J. M. Robson, with an introduction by R. F. McRae, Vol. 7, 8, Toronto: University of Toronto Press.

Mill, J. S. (1844). *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy,* London: Parker.

Mill, J. S. (1873). *Autography,* London: Longmans, Green, Reader, and Dyer.

Mill, J. S. and R. Torrens. (1936). *John Stuart Mill on the Measure of Value: 1822,* edited by J. H. Hollander, Baltimore: The Johns Hopkins Press.

Mitchell, A. (1967). *The Whigs in Opposition: 1815-1830,* Oxford: Clarendon Press.

Moore, P. (2009). "Torrens, Robert (1780?-1864)". In *Oxford Dictionary of National Biography,* edited by H. C. G. Matthew and B. Harrison, Vol. 55, Oxford: Oxford University Press: 56-8.

Napier, M. (1879). *Selection from the Correspondence of the Late Macvey Napier, Esq.,* edited by M. Napier, London: Macmillan and Co.

O'Brien, D. P. (1970). *J. R. McCulloch: A Study in Classical Economics,* London: Allen & Unwin.

O'Brien, D. P. (2004). *The Classical Economists Revisited,* Princeton: Princeton University Press.

Ricardo, D. (1817). *On the Principles of Political Economy, and Taxation,* London: Murray.

Ricardo, D. (1951-73). *The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by P. Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb, 11 vols., Cambridge: Cambridge University Press.（日本語版「リカードウ全集」刊行委員会［訳］『リカードウ全集』［全11巻］雄松堂, 1969-99）

Robbins, L. C. (1958). *Robert Torrens and the Evolution of Classical Economics,* London: Macmillan and Co.

Robbins, L. C. (1971). *Autobiography of an Economist,* London: Macmillan.（田中秀夫［監訳］『一経済学者の自伝』ミネルヴァ書房, 2009）

Schumpeter, J. A. (1954). *History of Economic Analysis,* edited from manuscript by E. B. Schumpeter, London: Allen & Unwin.（東畑精一・福岡正夫［訳］『経済分析の歴史』［上・中・下］岩波書店, 2005-6）

Seligman, E. R. A. (1903). "On Some Neglected British Economists", *The Economic Journal,* 13 (51): 335-63, (52): 511-35.（平瀬巳之吉［訳］『忘れられた経済学者たち』未来社, 1955）

Senior, N. W. (1829). *Two Lectures on Population, Delivered before the University of Oxford in Easter Term, 1828. To which is Added, a Correspondence between the Author and the Rev. T. R. Malthus,* London: Saunders and Otley.

Smith, A. (1776). *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations,* 3 vols., Dublin: Whitestone, Chamberlaine, Watson, Potts, Watson, Hoey, Williams, Colles, Wilson, Armitage, Walker, Moncrieffe, Jenkin, Gilbert, Cross, Mills, Hallhead, Faulkner, Hillary, and Colles.

Spence, W. (1807). *Britain Independent of Commerce; or, Proofs, Deduced from an Investigation into the True Causes of the Wealth of Nations, that our Riches, Prosperity, and Power, are Derived from Resources Inherent in ourselves, and would not be Affected, even though our Commerce were Annihilated,* London: Cadell and Davies.

Thompson, T. P. (1826). *The True Theory of Rent, in Opposition to Mr. Ricardo and Others. Being 'An Exposition of Fallacies on Rent, Tithes, & c.' In the Form of a Review of Mr. Mill's Elements of Political Economy. Second Edition,* London: Hatchard and Son.

Thompson, T. P. (1827). *A Catechism on the Corn Laws; with a List of Fallacies and the Answers,* London: Ridgway.

Tooke, T. (1823). *Thoughts and Details on the High and Low Prices of the Last Thirty Years,* London: Murray.

Torrens, R. ([1808] 1993). *The Economists Refuted; or, an Inquiry into the Nature and Extent of the Advantages Derived from Trade: With Observations on the Expediency of Making Peace with France. And an Appendix, Discussing the Policy of Prohibiting Corn in the Distilleries.* In Torrens (1993).

Torrens, R. (1812). *An Essay on Money and Paper Currency,* London: Johnson and Co.

Torrens, R. (1815). *An Essay on the External Corn Trade; Containing an Inquiry into the General Principles of that Important Branch of Traffic; an Examination of the Exceptions to which these Principles are Liable; and a Comparative Statement of the Effects which Restrictions on Importation and Free Intercourse, are Calculated to Produce upon Subsistence, Agriculture, Commerce, and Revenue,* London: Hatchard.

Torrens, R. (1816). *A Letter to the Right Honorable* [sic] *the Earl of Liverpool, on the State of the Agriculture of the United Kingdom, and on the Means of Relieving the Present Distress of the Farmer, and of Securing him against the Recurrence of Similar Embarrassment,* London: Hatchard.

Torrens, R. (1817). "A Paper on the Means of Reducing the Poors [sic] Rates, and of Affording Effectual and Permanent Relief to the Labouring Classes Presented to the Chairman of the Committee on the Poor Laws", *The Pamphleteer,* 10 (20): 509-28.

Torrens, R. ([1818] 1993). "Strictures on Mr. Ricardo's Doctrine Respecting Exchangeable Value", *The Edinburgh Magazine, and Literary Miscellany; a New Series of the Scots Magazine,* (October): 335-8. In Torrens (1993).

Torrens, R. (1819a). "On Mr. Owen's Plan, and the Causes of the Present Distress", *The Scotsman, or Edinburgh Political and Literary Journal,* (21 August): 265-6.

Torrens, R. (1819b). "Mr. Owen's Plans for Relieving the National Distress", *The Edinburgh Review, or Critical Journal,* 32 (October): 453-77.

Torrens, R. (1820). *An Essay on the Influence of the External Corn Trade upon the Production and Distribution of National Wealth; Containing an Inquiry into the General Principles of that Important Branch of Traffic; an Examination of the Exceptions to which these Principles are Liable; and a*

Comparative Statement of the Effects which Restrictions on Importation and Free Intercourse, are Respectively Calculated to Produce upon Subsistence, Agriculture, Commerce, and Revenue. Second Edition, with Considerable Additions, London: Hatchard and Son.

Torrens, R. (1821). *An Essay on the Production of Wealth; with an Appendix, in which the Principles of Political Economy are Applied to the Actual Circumstances of this Country,* London: Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown.

Torrens, R. (1826). *An Essay on the External Corn Trade. Third Edition*, London: Longman, Rees, Orme, Brown, and Green.

Torrens, R. (1827). *An Essay on the External Corn Trade. Fourth Edition*, London: Longman, Rees, Orme, Brown, and Green.

Torrens, R. (1829). *An Essay on the External Corn Trade. With an Appendix on the Means of Improving the Condition of the Labouring Classes. A New Edition*, London: Longman, Rees, Orme, Brown, and Green.

Torrens, R. ([1833] 1958). *Letters on Commercial Policy,* with an introduction by L. Robbins, London: London School of Economics and Political Science.

Torrens, R. (1834). *On Wage and Combination,* London: Longman, Rees, Orme, Brown, Green, and Longman.

Torrens, R. (1835). *Colonization of South Australia,* London: Longman, Rees, Orme, Brown, Green, and Longman.

Torrens, R. (1837a). *A Letter to the Right Honourable Lord Viscount Melbourne, on the Causes of the Recent Derangement in the Money Market, and on Bank Reform,* London: Longman, Rees, Orme, Brown, and Green.

Torrens, R. (1837b). *A Letter to the Right Honourable Lord Viscount Melbourne, on the Causes of the Recent Derangement in the Money Market, and on Bank Reform. Second Edition, with Additions,* London: Longman, Rees, Orme, Brown, and Green.

Torrens, R. (1837c). *Supplement to a Letter Addressed to the Right Honourable Lord Viscount Melbourne, on the Derangement in the Money Market, and on Bank Reform,* London: Longman, Rees, Orme, Brown, and Green.

Torrens, R. (1838). *On Wage and Combination. Second Edition,* London: Longman, Orme, Brown, Green, and Longman.

Torrens, R. (1844a). *The Budget. On Commercial and Colonial Policy. With an Introduction, in which the Deductive Method, as Presented in Mr. Mill's System of Logic, is Applied to the Solution of Some Controverted Questions in Political Economy,* London: Smith, Elder, and Co.

Torrens, R. (1844b). *An Inquiry into the Practical Working of the Proposed Arrangements for the Renewal of the Charter of the Bank of England, and the Regulation of the Currency: With a Refutation of the Fallacies Advanced by Mr. Tooke,* London: Smith, Elder, and Co.

Torrens, R. (1847). *On the Operation of the Bank Charter Act of 1844, as it Affects Commercial Credit,* London: Ridgway.

Torrens, R. (1858a). *The Principles and Practical Operation of Sir Robert Peel's Act of 1844, Explained and*

Defended. Third Edition, Revised and Enlarged: Comprising Critical Explanations of the Report of the Lords' Committee of 1848, upon National Distress; of the Novel Principles of Currency Propounded by Mr. Tooke and Mr. Wilson; and of the Chapter on the Regulation of Currency in Mr. J. S. Mill's "Principles of Political Economy", London: Longmans.

Torrens, R. (1858b). "Lord Overstone on Metallic and Paper Currency", *The Edinburgh Review, or Critical Journal,* 107 (January): 248-93.

Torrens, R. (1993). *The Economists Refuted and Other Early Economic Writings,* edited with an introduction by P. D. Groenewegen, Fairfield: Kelley.

Torrens, R. (2000). *Collected Works of Robert Torrens,* 8 vols., edited and introduced by G. de Vivo, Bristol: Overstone (Thoemmes Press).

Wallas, G. (1918). *The Life of Francis Place: 1771-1854,* London: Allen & Unwin.

Watson, G. (ed.) (1969). *The New Cambridge Bibliography of English Literature,* Vol. 3, Cambridge: Cambridge University Press.

West, E. (1815). *Essay on the Application of Capital to Land, with Observations Shewing the Impolicy of any Great Restriction of the Importation of Corn, and that the Bounty of 1688 did not Lower the Price of it,* London: Underwood.

Whewell, W. (1831). *Mathematical Exposition of Some of the Leading Doctrines in Mr. Ricardo's "Principles of Political Economy and Taxation",* Cambridge: Smith.

Winch, D. (1965). *Classical Political Economy and Colonies,* London: Bell and Sons.

河合康夫. (2006).「ロバート・トレンズの政治活動――1830年代前半ボルトンでの選挙活動を中心として――」. 飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸 (編著)『マルサスと同時代人たち』日本経済評論社 (所収).

小林時三郎. (1966).『古典学派の考察』未来社.

久松太郎. (2007).「トレンズのマルサス『経済学原理』評論」『マルサス学会年報』(16): 1-29.

藤塚知義. (1973).『経済学クラブ――イギリス経済学の展開――』ミネルヴァ書房.

丸山武志. (1999).『オウエンのユートピアと共生社会』ミネルヴァ書房.